

## 講評

『観光人類学のフィールドワーク ―ツーリズム現場の質的調査入門―』  
(市野澤潤平、碓陽子、東賢太郎[編著] 15名、ミネルヴァ書房、2021年)

本書は、観光をテーマにレポートや卒論を書く学生を対象に、フィールドワークを専門的に学ぶわけではない人向けの社会調査の方法論と観光の現場をフィールドワークするためのヒントを教示することをねらいとした、観光人類学のフィールドワーク教本である。3部構成で前半部分の第1部は人類学的フィールドワークの方法論、後半部分は事例で、第2部は国内の事例、第3部はインバウンド観光と国外の事例を扱っている。観光の現場は調査対象としてまだ新しく、確固としたマニュアルもない中で試行錯誤をしてきた10人の研究者によるバラエティに富んだフィールドワークの体験談を紹介している。

第1部では人類学のフィールドワークの基本的な枠組み、その方法論が語られ、一般的な論文の書き方、コロナ禍で現地調査ができないという現状でのサイバーフィールドワークの方法、企業の現場における問題解決のためのフィールドワークの在り方が提示されている。第1章から第3章までは人類学の意義、方法論、論文の作成方法など、学生がどのような心構えを持ち、計画を立ててフィールドワークを行えばよいのかがわかりやすく示されている。4章では上級編として、人類学のフィールドワークでは自身の感受性を意識することの重要性を説いている。学生にはやや難解ではあるが、ユニークで貴重な視点であると考える。第5章はサイバーに特化した内容で、その前までの章との関連性に少し唐突な感じを覚えるが、コロナ禍で現場に行けない現状では必要な知識である。少し残念なのは第6章で、企業における実務の問題解決に終始しており、学生を対象にしたものと考え、人類学的なフィールドワークとしては想定しにくいのではないだろうか。文章もこの章だけですます調で書かれていて、本全体の調和がとれていない感がある。

第2部、第3部については、各研究者の観光の現場におけるフィールドワークの実践、その苦労なども紹介されており、扱う現場・テーマも企業、観光まちづくり、祭り・イベント、災害地、訪日客、ビーチリゾート、観光開発、エコツーリズム、巡礼路と多くのモデルを学ぶことができる。各章末には「考えを深めるために」という設問があり、その章のテーマをさらに深く考察する機会が設けられている。

以上から、本書は観光人類学のフィールドワークを実践する学生にとって、理論と方法と実践のバランスの取れた教科書となっていると考える。よって教育啓蒙著作賞に該当すると判断した。

## 目次

### はじめに

### 第1部 人類学的フィールドワークの方法論

#### 第1章 フィールドワークの事前準備

- 第2章 フィールドにて：基礎編
- 第3章 論文を書く
- 第4章 フィールドにて：上級編
- 第5章 サイバーフィールドワークに出かけよう
- 第6章 実務におけるアウトプット

## 第2部 国内における事例集

- 第7章 旅行会社でのフィールドワーク
- 第8章 芸術祭のフィールドワーク
- 第9章 祭り×観光のフィールドワーク
- 第10章 農村景観を活かした観光まちづくりのフィールドワーク
- 第11章 災害と観光

## 第3部 訪日インバウンド観光と国外における事例集

- 第12章 訪日外国人観光客の実態
- 第13章 ビーチリゾートで調査をする
- 第14章 観光開発の現場でのフィールドワーク
- 第15章 エコツーリズム・プロジェクトの現場
- 第16章 スペインの巡礼路を歩く旅